

- A. L. : Percutaneous transhepatic cholangiography, Ann. Int. M., 54, 856, 1961.
- 19) Pack, G. T., Miller, T. R. & Brasfield, R. D. : Total right hepatic lobectomy for carcinoma of the gallbladder, Report of 3 cases, Ann. Surg., 142, 6, 1955.
- 20) 角原昭文 : 胆嚢癌, 肝外胆管癌について 第 I 篇, 臨床的並びに病理学的観察, 日外会誌, 63, 551, 1962.
- 21) 角原昭文 : 胆嚢癌, 肝外胆管癌について 第 II 篇, 肝空腸吻合術, 肝内胆管, 空腸吻合術の実験的, 臨床的研究, 日外会誌, 63, 663, 1962.
- 22) Sako, K., Seitzinger, G. L. & Garside, E. : Carcinoma of the extrahepatic bile ducts, a review of the literature and report of 6 cases, Surgery, 41, 416, 1957.
- 23) 綿貫重雄, 窪田博吉, 福島元之 : 外科的黄疸について, 臨床外科, 19, 29, 1964.
- 24) Warren, K. W., Cattell, R. B., Blackburn, J. P. & Nora, P. F. : A long-term appraisal of pancreaticoduodenal resection for peri-ampullary carcinoma, Ann. Surg., 155, 653, 1962.

■ 医学書院洋書だより ■

Albert B. Ferguson, Jr. 著

Orthopedic Surgery in Infancy & Childhood

小児整形外科はとくに興味のある諸問題を多数蔵しているが、とくに小児に限って記述した著書は少ない。

著者は、Pittsburg 大学整形外科教授として令名高く、Pittsburg メディカルセンターや小児病院の要職を兼ね、1957 年初版を増補改訂して、広汎な経験と多数の資料を蒐録し、又整形外科、小児科、外科並にレ線学者等多方面に渉る専門家の協力によって、小児を対照とする独特の整形外科分野の疾患とその治療法につ

いて、平明に解説している。

本書は種々なる先天性または後天性の小児の骨、関節ならびにこの隣接附属器官の疾患に関する知識を豊富に練入し、足、膝、股関節、脊柱、頸部、上肢、神経筋肉疾患および骨腫瘍等を区分している他、とくに小児整形外科としての臨床的見地からの一章をもうけているが、その中で特に小児切断肢に関する項目は稀なものであろう。また側彎症の問題は W. F. Donaldson によって可成りの頁に涉って、多数のシェーマ

を以て論述され参考となる点が多い。

骨形成欠損や骨系統疾患の章はとくに興味深く、とくに著者自身によって書かれた骨系統疾患の部は、本書の中でもつとも蘊蓄を傾けられ、広汎な範囲にわたる難しい疾患を、豊富な普通写真、X線および組織像を中心に、要領よく解説し、実地上極めて有用で、この方面に関心をもつ人たちのよき伴侶となろう。

投 稿 規 定

- 1) 原稿はすべて平仮名を用い、口語体とし、新かなづかいで、句読点をうち、必ず原稿用紙を用いて下さい。なお論文題名ならびに所属名には欧文の訳をつけ、著者名にも必ずローマ字綴りを付記すること。
- 2) 外国語は原語綴りまたは片カナで書き、「」はつけないこと、また度量衡の単位は mm cm m cc dl mg g 等と記すこと。
論文の長さは、図表を含めて、
イ) 症例報告は本誌 2 頁以内 (400 字詰 8 枚以内) 図表は 5 枚以内。
ロ) 論説、綜説は 4 頁以内 (400 字詰 10 枚程度) 図表は 5 枚以内。
- 4) 論文の書き方は従来の習慣にとらわれず、平明簡潔に、重複をさけ、図表を活用し、新しい形式を工夫して短く書いて下さい。
- 5) 本文中図表の入る個所を必ず指定して下さい。
- 6) 原稿は東京都文京区本郷 6 の 20 医学書院「臨床外科」編集室宛お送り下さい。
- 7) 原稿論文の採否およびその掲載の時期は編集委員会によって決定します。
- 8) 掲載の分には別刷 50 部を無料でさしあげます。それ以上の別冊を御希望の場合は 50 部を単位として実費で印刷致しますので、必要部数をお知らせ下さい。

- and Surgical Management, Surg. Clin. N Amer. 39 : 781-798 (June), 1959.
- 66) Robinson, N. M., Beckfield, W. and Goldurgh, H. C. : Carcinoma of Head of Pancreas, Long Term Survival, Ann. Int. Med. 53 : 1036-1041, 1960.
- 67) C. B. Puestow, M. D. et : Carcinoma of Ampulla of Vater and Head of Pancreas Causing Jaundice, Arch. of Surg. 69, 564-581, 1954.
- 68) J. T. Priestley et. : Malignant Lesions of the Bile Ducts and Head of the Pancreas. The Surgical Clinics of North America 41, 963, 1961.
- 69) K. W. Warren and R. B. Cattell, et. : A Long-term Appraisal of Pancreaticoduodenal Resection for Peri- Ampullary Carcinoma. Ann. Surg. 155, 653-662, 1962.
- 70) T. T. White and D. F. Magee : Progress in Surgery of the Pancreas Since 1945. Progress in Surgery. From the University of Washington School of Medicine, Seattle 5, Washington. 1945.
- 71) R. D. Williams : Palliative Procedures for Carcinoma of the Head of the Pancreas. from The Ohio State University Health Center.
- 72) J. T. Priestley : Recognition of Lesions of the Pancreas Amenable to Surgical Treatment, Postgraduate Medicine, Mayo Clinic and Mayo Foundation, Rochester, Minnesota 1963.
- 73) D. O. Ferris, Waltman Walters, James T. Priestley, John M. Waugh, Edward S., Judd, George A. Hallenbeck and William H. Remine : Report of Surgery of the Biliary System and Pancreas for 1958 and 1959 : Proceedings of the Staff Meetings of the MAYO CLINIC. 1962.
- 74) B. M. Zollinger and D. W. Elliott : Surgery for Malignant Jaundice, Arch. Surg. 80 : 992-997, 1960.
- 75) J. T. Priestley et. : Benign Neoplasms of Extrahepatic Bile Ducts, Including Papilla of Vater. Arch. Surg. 81, 479-484, 1960.
- 76) J. T. Priestley & M. B. Dockerty : An Evaluation of Pancreatic Biopsy with the Vim-Silverman Needle. Archives of Surgery. 79, 588-596, 1959.
- 77) J. M. Waugh and George a. Hallenbeck : The Pancreas. Mayo Clinic, Rochester, Minnesota U. S. A.
- 78) Arthur G. James : Cancer Prognosis Manual, Published by the American Cancer Society Inc.
- 79) E. L. Wollaeger : Malignant Lesions of the Bile Ducts and Head of the Pancreas, Surgical Clinics of North America 41 : 963, 1961.

■ 医学書院洋書だより ■

Aegerter E and Kirkpatrick J. A. 著

Orthopedic Diseases, Physiology Pathology Radiology

近年、骨の生理および病理の研究は、いちじるしい進歩を遂げ、骨の蛋白や多糖体、塩類の性状、その代謝、全身の他臓器機能との関連が、かなりくわしくわかってきている。そして、従来、病因論としては、臆測的学説の羅列しかみられなかった一群の骨系統疾患や、先天性疾患にも、異常の焦点が、生化学的、細胞学的、血清学的、遺伝学的基礎に立つて説明されるようになってきている。とはいえ、まだまだ未解決の疾患の方がはるかに多く、しかもまた新たな疾患や症候群も登場しているので、解決にはほど遠いであろうが、ともあれ、この方面の研究には

大きな興味もたれている。

本書は整形外科の疾患の中でも、結合組織の生理、代謝、内分泌の関連する部分を、最近の学説にもとづいて、基礎的にわかりやすく説明している。

表1章の A general Consideration of Connective Tissue は、骨および結合組織一般を扱っており、100頁位のところに要領よく興味ある記述をしている。

第2章以下第5章まで、骨系統の発育過程の異常、正常に発育した骨におこる諸疾患、腫瘍、関節炎と、斬新な分類によつて記述を進めている。扱っている疾患は、感染症に関

する部分は比較的少なく、骨系統疾患、代謝異常、腫瘍、非感染性関節疾患に大部分の頁をさいている。このことは、近年の学問の進歩のみられるところを大きく扱つたもので、本書の価値をいささかも減ずるものではなく、本書の大きな特色というべきであろう。

Aegerter は病理の教授、Kirkpatrick は放射線学の教授、鮮明な組織像とレ線写真を豊富にのせて、説明もわかりやすく詳細である。病理学的理解にもとづいて診断するには、座右に具えてくりかえし参照したい良書であると思う。

(東大分院整形外科 松本 淳)

- 17) 中山他：放射線治療と手術，臨床放射線，7，11，1962.
- 18) 中山他：癌に対する術前照射の研究，日放医学誌，23，958，1963.
- 19) Kepp, R. K.: Die Bedeutung von Radiogold 198 für die Gynekologische Strahlentherapie. Deut. Med. Wsch., 80, 19, 1955.
- 20) Müller, J. H.: Intraperitoneal application of radioactive colloids. ed. by P. E. Hahn. Therapeutic use of artificial radioisotopes. John Wiley & Sons. N. Y., 1956.
- 21) 山下他：膠状放射性物質特に ^{198}Au の臨床経験，癌，47，672，1956.
- 22) 奥原他：放射性 ^{198}Au による悪性腫瘍の治療，第 2 回アイソトープ会議報文集，407，1958.
- 23) 岸上：放射性金 ^{198}Au による悪性腫瘍の治療，医療，13，431，1959.
- 24) 寛他：Radiocolloid による治療と病理組織学的変化，日放医学誌，20，207，1960.
- 25) 西岡他：放射性金コロイドの使用経験，広島医学，13，156，1960.
- 26) 楠他：腹水に対する放射性コロイド療法，広島医学，15，29，1962.

書

評

Conceptual Advances in Immunology and Oncology

(A Collection of Papers at the 16th Annual Symposium on
Fundamental Cancer Research 1962)

国立がんセンター研究所生化学部長

杉 村 隆

本書は The University of Texas, M. D. Anderson Hospital and Tumor Institute で毎年行なわれる癌の基礎研究のペーパーを集めたものである。

内容は 5 つのグループにわかれ，おのおの 5 ～ 8 篇の報文よりなっている。その 5 つのグループとは“抗体産生の理論”“抗体合成の調節機構”“抗原抗体反応の性質”“移植と免疫耐性”“癌特異抗原”である。さらに Bertner Foundation の第 9 回の賞を授与された Dr. G. D. Snell の免疫と組織移植と題する Bertner Foundation Lecture が収録されている。

まずノーベル賞受賞者の Burnet

は抗体産生に関する鋳型 (template) 説と選択説 (selection) とをのべ，後者の立場をとる genetic approach を強調している。ついで F. Haurowitz はそれを批判して鋳型説について述べている。第 2 の section ではインターフェロン，代謝拮抗物質，出生直後の胸腺摘出などの抗体産生におよぼす影響などが課題となつていて。第 3 の section では不溶性のパペインを用いての抗原抗体反応生成物の構造の研究，DNA または DNA に付着した物質の抗原性についてのべている。第 4 の section では免疫耐性の問題がいろいろな角度から論じられている。第 5 の section には癌原性物質やウイルス

スによる実験癌に対する免疫，ポリオマウイルスの発癌に対する免疫学的考察，人間の癌に対する自家免疫の問題などがふくまれている。

以上通覧してわかるように，免疫の問題それ自身，および癌の問題をふくめてきわめて最近までの実験結果および考え方が 1 冊にまとまっており，癌の問題に対する免疫学的研究の再認識あるいは免疫現象の分子レベルでの研究の重要視される今日この書物はまことに有状である。

(577 pp., with figs., Paul B. Hoeber, New York, 1963. ¥6,400. 医学書院洋書部扱)

投稿規定についての御願い

33頁に投稿規定が掲載されてあります。

御寄稿の諸先生に御願ひ致します。殊に**欧文題名**に就ては，ぜひ御原稿に付記下さいませ。また発信事務**連絡先**を御明記下さい。

「臨床外科」編集室